

ふるさと米子探検隊

第25号 中世の城跡を探しにいこう！の巻



米子市立図書館 編刊／2023.3 TEL0859-22-2612 FAX0859-22-2637 <http://www.yonago-toshokan.jp>

ふるさとの最強の城たち

平成 17 (2005) 年に発行した「ふるさと米子探検隊」第 2 号では、「米子城入門の巻」として米子城の歴史年表やゆかりの人物、城内と城下町マップを紹介しました。それから 20 年近くが経ち、米子城を取り巻く環境も大きく変わってきました。平成 18 (2006) 年に国指定史跡となり、令和 3 (2021) 年には三の丸の一部（旧湊山球場）も国指定史跡に追加されました。令和 4 (2022) 年 1 月には、NHK 番組で米子城が日本一の「最強の城」に選ばれ、美しい中海や大山を一望できる絶景の城跡として、県内外からますます注目されるようになりました。

さて、湊山に米子城が築かれるまで、実は米子周辺にたくさんのお城があったことをご存知ですか？米子市内では約 19 カ所、西伯耆では約 125 カ所、鳥取県で 504 カ所、出雲、因幡を合わせるとなんと 1500 以上の城跡がこれまでの調査で見つかっています。これらの城の多くは中世（鎌倉～室町時代）に建てられた城で、今でも米子周辺の様々な場所に跡が残されています。

今回の探検隊は、米子城につながる中世の時代、米子周辺にあった最強の城たちを探検します。美しい絶景の米子城ができるまで、私たちのふるさとにはどのような歴史があったのでしょうか。今も数多く残る身近な城跡を探しに出かけましょう！



米子城跡

探検隊の参考資料

今回の探検隊作成で参考にした資料です。図書館には、みんなの探検を助けてくれるたくさんの資料があります。資料の詳しい紹介は、米子市立図書館郷土資料調べ案内「冒険の書」をご覧ください。

- 『鳥取県中世城館分布調査報告書第2集（伯耆編）2004 鳥取県教育委員会
- 『郷土史跡めぐり西伯耆編』鳥取県立米子図書館編 1980
- 『尼子氏の城郭と合戦』寺井毅著 戎光祥出版 2018
- 『山陰の城館跡改訂版 山陰史跡ガイドブック第1巻』史跡整備ネットワーク会議事務局 2021
- 『鳥取県の山 分県登山ガイド30』藤原 道弘／著 山と溪谷社 2018
- 『鳥根県の山 分県登山ガイド31』岡本 良治／著 山と溪谷社 2018
- 『鳥取県の地名 日本歴史地名大系 32』平凡社 1992
- 『鳥根県の地名 日本歴史地名大系 33』平凡社 1995
- 『伯耆志（全）』景山、肅雍／著 世界聖典刊行協会 1982
- 『日本城郭大系第14巻鳥取・鳥根・山口』新人物往来社 1980
- 『山陰の戦国史跡を歩く鳥取編』加賀康之著 2018
- 『山陰の戦国史跡を歩く鳥根編』加賀康之著 2019
- 『新修米子市史第2巻 通史編 近世』米子市 2004
- 『戦国の城ワイド&パノラマ鳥瞰・復元イラスト』香川元太郎／イラスト ワン・パブリッシング2021
- 『鳥取県の考古学第6巻 古代・中世・近世社会と暮らし』鳥取県埋蔵文化センター 2013

戦国時代の伯耆国

室町時代におこった応仁・文明の乱以降の不安定な時代を戦国時代といいます



飯山

山名氏の守護～飯山城の完成～ 最初に米子のまちに城が建てられたのは、室町時代の応仁・文明（1467～1487）ごろ、山名宗之によって築されました。このころの伯耆国は、山名氏という一族が守護していました。城は湊山のとなりにある飯山に築されました（以下、飯山城）。

この時代は守護大名（領国の武士を家来として従え、国司にかわって一国を支配する守護のこと）たちが8代將軍足利義政の跡継ぎをめぐって争いをはじめ、やがて全国の多くの守護大名たちを巻き込み戦乱となった時代でした。世にいう「応仁・文明の乱」です。この乱で守護大名たちは力を使い果たし、次第に守護大名の下にいた守護代や国人（地方の有力武士）が力をつけ、守護大名に代わって国を治めるようになる下剋上がおこります。出雲国では尼子氏が守護大名だった京極氏と争い、出雲国を治めるようになりました。周防、長門（今の山口県）では毛利氏が勢力を拡大していきます。

出雲国の尼子氏は、伯耆国の山名氏と激しく争うようになりました。米子をはじめとする西伯耆には、出雲の尼子勢力を防ぐため、多くの城砦が築されました。飯山城は出雲と伯耆の国境を守る最前線の砦として重要な場所でした。飯山城が築かれる以前から、米子のまちは港町としての機能をもっていました。城を建てた飯山のすぐ下には深浦港があり、軍船が行き来しやすい場所だったことも、合戦では大きな役割を果たしたといえます。

深浦（昭和30年ごろ）



尼子氏が伯耆国を支配 大永4（1524）年、出雲の守護大名・尼子経久が伯耆に侵攻し、飯山城をはじめ淀江や尾高など、西伯耆にある城砦を次々に攻め落としました。この尼子経久の西伯耆侵攻を、一説には「大永の五月崩れ」と呼び、短期間で一気に攻め落とし、一方的に制圧したといわれていますが、実際は大永4年以前から数年にわたって各地で戦があり、攻防戦をくりかえしながら、少しずつ尼子氏が伯耆国で勢力を伸ばしていったのではと考えられています。こうして伯耆国は山名氏にかわって尼子氏が支配するようになります。尼子氏は現在の島根県安来市伯太町にある月山富田城を拠点とし、全盛期をむかえます。



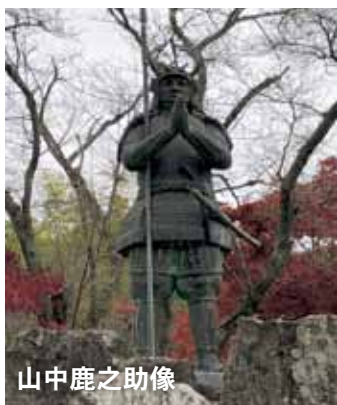
尼子氏 vs. 毛利氏の戦い 西伯耆をはじめ山陰を支配した尼子氏は、今度は山陽の守護大名たちと戦い、勢力争いを繰り返します。天文12（1543）年には周防国、長門国の領主の大内氏と毛利氏の連合軍が難攻不落の富田城を攻撃しますが、尼子軍が勝利します。このとき活躍したのは米子市車尾出身の深田泥介で、広島と島根の県境で毛利軍を追い払いました。天文21（1552）年になると、尼子晴久が山陰と現在の岡山県をふくむ8か国の守護大名に任命され、全国でもトップクラスの守護大名になりました。

月山富田城跡



永禄5（1562）年、毛利元就が再び富田城を攻撃します。この頃には、因幡や但馬に逃げていた伯耆の武士たちが、毛利氏の力を借りて尼子氏と戦うようになっていました。伯耆の各地の城砦は月山富田城の防衛ラインで、因幡・但馬方面から兵糧（食料）を富田城に運ぶための中継地でもありました。尼子氏VS毛利氏による激しい城の争奪戦が各地で行われ、飯山城は毛利勢の福頼元秀が、現在の米子市尾高にあった尾高城は、毛利元就の部下である杉原盛重が城主となり、尼子氏と戦いました。ついに永禄9（1566）年11月28日、尼子軍は敗れ、難攻不落といわれた富田城は兵糧攻めによって毛利氏の手落ち、出雲、伯耆、因幡は毛利氏の支配に入りました。

山中鹿之助と尼子再興の戦い



山中鹿之助像

山陰を統治した毛利氏でしたが、その道のりはまだ困難が多くありました。永禄 11 (1568) 年、毛利軍が九州に行く隙をねらい、尼子勝久と安来市広瀬の山中鹿之助という武士が因幡・伯耆に侵攻します。毛利を倒し、尼子を再興（復活）しようとする戦いが各地で繰り広げられました。鹿之助は「尼子十勇士」として有名な武士で、尼子軍十人の優れた武士の一人でした。深田泥助も十勇士の一人です。現代まで語りつがれている尼子十勇士は、創作上の架空の人物もふくまれています。山中鹿之助、深田泥助は実在した人物でした。元亀 2 (1571) 年には鹿之助率いる尼子軍が尾高城下に攻め込みました。毛利勢の福頼元秀がたてこもる飯山城にも尼子軍が大勢攻めこみます。米子城下には火がつけられ、多くの家が焼けました。しかし、毛利軍の猛攻撃によって尼子軍は大きな成果を出すことはできません。鹿之助は大山町の末吉城にたてこもっていましたが、降参して尾高城にとらわれました。こうして尼子を再興させる戦いは、尼子氏が次第に勢力をなくし、ついに天正 6 (1578) 年、尼子氏は滅亡し、尼子再興の夢は消えました。

毛利氏 vs. 織田氏の戦い～米子城の完成



米子城跡から望む美しい中海

天正 5 (1577) 年からおよそ 6 年間、山陰東部を中心に、毛利氏 vs. 織田氏の激しい戦いが繰り広げられました。天正 10 (1582) 年に織田信長が本能寺の変で亡くなると、織田氏についていた豊臣秀吉と毛利氏は和解し、伯耆国内で互いの領地の境界を決めました。天正 19 (1591) 年、西伯耆・東出雲・隠岐 12 万石は毛利氏の一族である吉川広家の領地となります。広家は、最初は月山富田城に入りますが、

交通の要衝（重要な地点）である米子に城を築くことを決めます。美しい大山が見え、中海が自然の堀となる湊山に石垣づくりの城の建築を始めました。これが今も石垣が残る米子城のはじまりです。しかし、広家は秀吉の朝鮮出兵に加わったり、関ヶ原の戦い後は岩国（今の山口県）の領主になったりしたため、米子城は未完成となってしまいました。慶長 5 (1600) 年、吉川広家に代わり駿河（今の静岡県）から中村一忠がやってきて、伯耆国 18 万石の領主となります。中村一忠は慶長 7 (1602) 年ごろに米子城を完成させました。しかし、慶長 14 (1609) 年に中村一忠は急死し、中村家は断絶します。慶長 15 (1610) 年に加藤貞泰が米子に入り、元和 3 (1617) 年には伯耆・因幡の領主池田氏の領地となります。



米子城跡から望む大山

中世の城の終焉 こうして長く戦乱が続いた中世の時代には、全国でおよそ 4 万もの城が築かれたといわれています。しかし、全ての城が大きく立派で、ずっと使われていたわけではありません。この時代の城は小さく簡素なものが多い上、戦況に応じて防衛の場所も変わるため、一度使用した城を捨てて新しい城を別の場所に建てるということもありました。こうして大小様々な城が爆発的に増えていったのです。

関ヶ原の戦い後の元和元 (1615) 年、天下をとった徳川家康は、各国の大名たちの軍事力を弱めるために「一国一城令」を発し、大名の居城以外の城をなくすよう命じました。これにより西伯耆の城は米子城を除いてすべて廃城となりました。米子城は鳥取城の支城として例外的に残ることになり、池田家の家老荒尾成利が米子城を預かるようになりました。

平和な世に
城はいらんじゃ！



徳川家康

中世の城跡

「山城」の誕生 南北朝時代、各地域で力を持った国人や土豪（守護の配下に属さない武士、上層の農民や土着した武士など）ら武士

天然の要塞 船上山



たちは、戦に備えて軍事的に防衛するための「城」を領地に築きました。この時代、最も多く造られたのは「山城」でした。西伯耆を代表する山城は、鳥取県琴浦町にある船上山です。正慶2（1333）年、後醍醐天皇が天然の要塞といわれた船上山に立てこもり、幕府軍の攻撃を退けたことは有名です。戦国時代末期になると、尼子氏をはじめ有力な戦国大名たちがより攻撃・防御に優れた規模の大きな山城を築くようになりました。その中でも難攻不落の名城といわれた山城が、安来にあった月山富田城です。ほかに、平地に造られた「平城」、標高の低い山に造った「平山城」など、「城」は地形に合わせて様々な種類がありました。なだらかな地形の米子周辺には、丘陵（標高差が低い小山、丘）に建てられた平城、

山城のイメージ図



平山城が多くありました。また、政治・軍事の中心となる本城をはじめ、領内には交通の重要な地点や隣国の境界などに多くの支城がありました。支城には大名の親族や重臣たちが城主となって住み、戦の際には本城へいち早く情報を伝えたり、食糧を運んだりするネットワークが構築されていました。

中世の城館 「城館」とは、敵から身を守るための軍事的施設である「城」と、領主や武士たちが普段住むための「館」（屋敷）の2つの機能をあわせもった施設のことです。かつて古代の地方領主が住んでいた「館」を、中世の武士が敵からの攻撃を防ぐために強い守りに変えていった城館もあります。中世では、戦乱とともに「城」や「館」の機能は改変されていきました。また、山城は敵に攻撃されたときに逃げこむための場所で、建物もほとんどなく、生活をするには不便でした。そこで普段は山城のふもとに居館を建てて暮らしていました。こうした戦う場所と住む場所が分かれた二元的構造も中世城館の特徴の一つです。

中世の城は土の城 中世の城は近世の城とは違って、石垣や天主などがありません。土を盛り上げた土台の上に城郭（敵の攻撃から守るための施設）を作り、堀（土を掘った溝）や土塁（敵を防ぐため土を盛って築かれた防壁）で城の周りを囲み防御する「土の城」でした。屋根があっても瓦ではなく板でできていて、火や雪にも弱いものでした。やがて近世になると土塁を補強するための石造りの技術が普及し、土の城から石の城へと変化していきました。

「城」は「土」から成る、軍事施設なんじゃ！



西伯耆

①尾高城跡 米子市尾高にある標高40mの丘陵に築かれた、西伯耆最大の戦国時代の城館跡です。出雲、日野、大山寺へつながる交通の要所で、米子城ができるまでは西伯耆を守る大事な拠点でした。8つの四角形の郭（石垣や土塁で仕切られた一区画）で構成された南北約400m、東西約200mの広大な平城です。室町時代には伯耆国の国人である行松氏が居城していましたが、尼子・毛利



尾高城跡看板に描かれた尾高城想像図

の争奪戦が繰り返された後、毛利方の杉原盛重が尾高城主となりました。尼子再興戦では山中鹿之助が捕らえられていましたが、厠（トイレ）から脱走したといわれています。中村一忠は米子城が完成するまでのおよそ1年間、尾高城に住んでいました。米子城完成後に廃城となり、尾高城下にいた家臣や町人の多くは、現在の米子市尾高町に移住しました。尾高城跡は、昭和52年に米子市の指定史跡となりました。令和3（2021）年度には42年ぶりに発掘調査が行われ、米子城につながる尾高城の歴史は、今後も注目が高まっています。

②河岡城跡 ^{かわおかじょう} 米子市河岡にあったといわれる城で、^{み さきじんじや} 御崎神社付近にあったと伝えられています。城主の河岡氏は尼子氏に従っていましたが、永禄 2 (1559) 年ごろに毛利氏側につきました。尼子・毛利戦では河岡城は何度も攻撃を受けました。尼子再興戦のころには、河岡城の機能は尾高城に移っていたのではと考えられています。



戸上山

③戸上城（観音寺城／戸上山城）跡 ^{とがみじょう} ^{かんのんじ} 米子市観音寺にある戸上山標高 63m の上にあった平山城で、東側には法勝寺川が流れ、箕蚊屋平野を見渡すことができます。発掘調査では多くの郭が見つかりま
^{ほつしやうじがわ} す。天文 (1532 ~ 1555) 年間には久代氏が居城し、観音寺というお寺をお寺を建てましたが、後に尾高城に入る杉原盛重が尾高村にお寺を移したため、地名だけが残りました。天正 19 (1591) 年には毛利の家臣の古曳氏が戸上城に入り、その後米子城の完成とともに廃城になりました。城下町の四日市村は、今の米子市四日市町に移りました。

④橋本七尾城（橋本城／橋本要害）跡 ^{はしもとなおじょう} 米子市橋本にある^{ほうせきざんちやう} 宝石山頂上にあった城で、尾高城を本拠地としていた行松氏の支城の一つといわれています。出雲からの侵攻に備えていました。行松氏が尼子氏に追われて尾高城を去ったとき、七尾城も捨てたか、^{あだかやじんじや} 尼子氏の手に残ったのではないかと考えられています。登山口には阿陀萱神社があり、宝石山の名前の由来となった天から降ってきたという岩が祀られています。



宝石山山頂にある城跡



阿陀萱神社と天の岩

⑤石井要害跡 米子市石井にある標高 29 m の丘陵の上の城館で、丘陵のまわりは^{みずぼり} 水堀で囲まれていたと考えられています。戦国時代には尼子氏の家臣である片山小四郎が居城していました。七尾城とともに、出雲からの侵攻に備えていました。15 世紀後半に大きな郭などが造られて城の守りを固めていましたが、その後その防御施設を埋め立てて、造り変えていることが発掘調査で分かっています。かつてはもっと標高が高かったそうですが、ほとんどが削られ、^{やはたじんじや} 現在は八幡神社が建つ二の丸と推定される郭の一部が集落の中にぽっかりと残っています。



石井要害跡

⑥富長城跡 ^{とみながじょう} 大山町富長にある富長神社の境内にあります。標高 26 m、北は日本海、東は川、南と西側は深い堀（土を掘って作った路）と土塁に囲まれていて、広大な境内の中に今も驚くほど迫力ある城館跡を残しています。今から 700 年くらい前の鎌倉時代に建てられ、戦国時代には西伯の豪族・^{ふくよりさえものじやう} 福頼左衛門尉の城であったと伝えられています。



富長神社

⑦末吉城跡 大山から日本海、美保関を結ぶ経路の重要な地点にあったとされる平城です。城主も不明で城跡も残っていませんが、尼子再興戦では尼子勝久と山中幸盛が大山の経悟院という僧坊と協力して末吉城に立てこもりました。元亀 2 (1571) 年、吉川元春が末吉城を攻撃し、山中鹿之助はここで捕えられ、尾高城に送られました。末吉集落の国道 9 号線沿いに、山中鹿之助の^{くようとう} 供養塔と、毛利氏の使者として末吉城に入り、命を落とした地元の侍・^{みかもづか} 美甘与一右衛門を祀る美甘塚があります。



山中鹿之助供養塔

⑧富繁城（外構城）跡 ^{とみしげじやう} ^{とがまえじやう} 米子市淀江町富繁にある丘陵の上の城跡です。山名氏ゆかりの人々の城だったと伝えられています。富繁はかつては「外構」という地名でした。「外構」は堀や門、建物のまわりを意味し、この地名からもかつて村に城があったことが伺えます。西伯耆、東伯耆、日野につながる交通の重要な地点にあり、城は何度も攻防戦が繰り広げられたといわれています。



富繁城跡

⑨小波城跡 こ なみじょう 米子市淀江町小波にあったとされる標高 12 m の台地に造られた平城です。元弘（1331-1334）年ごろに大石橋氏が城主だったといわれていますが、くわしくは分かっていません。発掘調査では堀切（尾根を切って道を断った堀）や土塁などが発見され、陶磁器や土器も見つかっています。



⑩淀江城跡 よど えじょう 現在の JR 淀江駅付近がその跡といわれていますが、城跡は残っていません。戦国時代は山名氏の砦の一つで、西伯、日野の交通の大事な地点でした。尼子経久によって落城し、その後は毛利氏の城になりますが、永禄 12（1569）年に山中幸盛が尼子再興のため、淀江城と末吉城と稲吉城の 3 つの城を利用して戦ったといわれています。

⑪佐陀城跡 さ だじょう 米子市淀江町佐陀にある佐陀神社付近にあった城で、土塁が今も見られます。尾高城の城主杉原盛重の次男が兄を暗殺し、その後兄の亡霊にうなされて尾高城を離れて佐陀城を築いたという伝説があります。次男は兄の暗殺を毛利氏に知られ処刑され、佐陀城も破壊されたと伝えられています。

⑫岸本要害（岸本城）跡 ふしろうべつしよながはる JR 岸本駅の近くにある平城跡です。戦国時代の武将別所長治とゆかりがあるとされています。尾高城に近いので、何か関連があるかもしれません。



⑬手間要害跡 て まようがい 西伯郡南部町の手間要害山にある山城跡です。かつては日野氏が城主だったといわれています。発掘調査では郭をはじめ、陶磁器やつぶて石などがみつかっています。手間要害は尼子経久の西伯耆侵攻で尼子氏の城となりますが、その後は毛利、尼子の激しい争奪戦が繰り広げられ、天正 12（1584）年に毛利軍によって落城、廃城となりました。尾高城主の杉原盛重の城の一つだったため、近くの大安寺には杉原盛重の供養塔があります。



⑭鎌倉山城跡 かまくらやま 南部町にある鎌倉山に、元享 3（1323）年ごろ戸田備中守森正が城を築いたといわれています。標高がおよそ 730 m あり、西伯耆では大山の次に高い山です。険しい地形を活かした軍事的設備があったと考えられますが、くわしい歴史は分かっていません。鎌倉山は伝説や物語が多く作られたロマンあふれる場所でもあります。



⑮法勝寺城跡 ほっしょうじ 南部町にある法勝寺川沿いにあった城跡で、町指定史跡となっています。法勝寺川が天然の堀となっていました。出雲と日野の境界にあり、西伯耆の重要な防衛・交通ラインでした。山名氏が築いたといわれています。尼子・毛利の争奪戦が繰り広げられ、天正 20（1592）年ごろまで西伯耆の主要な城として機能していました。米子城ができて廃城となり、法勝寺城下に住んでいた人たちは、今の米子市法勝寺町に移り住みました。

⑯小松城跡 いずものくにのみやつこ ホタルの里としても有名な南部町金田にある町指定史跡です。その歴史は古く、南北朝時代に築かれ、戦国時代まで長く使われたといわれています。標高 60m の丘陵の上にあり、保存状態も良い城跡です。建武 3（1336）年に出雲国造（古代出雲の豪族）の軍が伯耆にやってきて小松城を攻め、城の門前で激しい戦いがあったと伝えられています。



⑰江美城跡 えびじょう 日野郡江府町の J R 江尾駅近くにある城跡です。文明年間（1469-1487）に築かれたといわれています。日野の一族である蜂塚氏が城主でした。尼子の味方だったため、永禄 7（1564）年に杉原盛重率いる毛利軍に攻められ、江美城は落城します。その後は毛利氏によって近世城郭へと改修されました。お城に続く大きな抜け穴跡や、枡形とよばれる敵を招き入れて矢や石で攻撃する施設跡を見ることができます。



江美城跡

東出雲

⑱月山富田城跡 ひのぐんこうふちよう 安来市広瀬町の月山にある国指定史跡です。戦国大名尼子氏の本拠地で中四国最大級の山城です。難攻不落の名城といわれ、毛利氏の攻撃でも落城しなかった最強の城でした。最終的に毛利氏による兵糧攻めで落城します。尼子氏滅亡後は吉川広家によって改修工事がされ、その後城主となった堀尾氏が松江城を築くまで、出雲国の中枢として機能しました。現在は整備が進められ、頂上からは安来平野や中海など絶景を楽しむことができます。

月山富田城中腹にある御殿跡



安田要害山頂上

⑲安田要害（新山要害）跡 やすだようがい にいやまようがい 米子と安来の県境にある山城跡です。米子側からは新山要害、安来側からは安田要害と呼ばれています。出雲と伯耆をまたぐ重要な場所にあり、古くから利用されていました。頂上は安来から米子、大山、南部町一帯を見渡せる



安田要害山登山道

絶景を楽しめます。尼子経久の家臣・安井光照が国境警備のために築きました。後に福山源五郎という人物が城主となったとき、尾高城主の杉原盛重率いる毛利軍に攻められます。尼子・毛利の攻防戦を繰り返しながら、永禄 8（1565）年に落城しました。



十神山

⑳十神山城跡 と かみやま 安来市の安来港近くにある標高 92 m の平山城跡です。かつて安来を支配していた松田氏の城でした。松田氏は美保関をはじめ出雲最大の海上勢力をもっていました。応仁の乱で松田氏は追われ、十神山城は尼子氏の城となりますが、その後も尼子と毛利の争奪戦が繰り返されました。永禄 8（1565）年に毛利軍の攻撃で落城し、元亀元（1570）

年の尼子再興戦で再び争奪戦が起きました。月山富田城周辺を守る尼子十砦の一つです。

㉑京羅木山城塞群跡

安来市広瀬町と東出雲町の境目にある標高 473 m の山城跡です。月山富田城の向かい側にあり、天文 12（1543）年、周防（今の山口県）の大内氏が尼子氏を攻めるために京羅木山に陣をかまいましたが、大敗します。永禄 7（1564）年には毛利氏が尼子氏攻略のため陣をかまえますが、富田城はなかなか攻略することができませんでした。山頂の見晴らしは良く、目の前の月山をはじめ遠くに大山を見することもできます。



月山から望む京羅木山

月山富田城のまわりは、富田城の支城はもちろん、富田城を攻めるための城跡も多いぞ！



月山から望む独松山

㉒独松山城塞群跡 どくしょうざんじょうさいぐんあと 尼子十砦の一つです。高松山ともよばれ、3つの山が連なっています。かつては富田城から伯耆方面を抜ける尼子道（軍用の道）が整備されていたといわれています。月山富田城からおよそ 3 km の一番近い場所にあり、山頂には緊急の知らせを伝える鐘撞堂があったといわれています。



独松山頂上

今回の探検隊で紹介した城跡マップです。きみの家の近くにもあるかも？！

にしほう ひがしいずり ちゅうせいこじょうあ 西伯耆・東出雲 中世古城跡マップ

